



超体験!?
**SUMMER
BOYS**

成人向
FOR ADULT ONLY





「…やっぱり短すぎないか？コレ」

緑のスカートを留めながら、ライトグレーの短パンから出る自分の剥き出しの太股を見た少年は、恥かしそうに頬を染めて困惑の表情を浮かべた。

「うん！めっちゃ笑える！遼ちゃん、やっぱり中学校二年生にもなってソレは無いよね！」

間髪いれずにそう言った、鼻に絆創膏を貼っている少年は、ニヤニヤと笑って、携帯で遼の股間を撮影する。

ただしその少年自身も、さらに短い半ズボンから、日に焼けた太股を晒しているのだが、小学生の自分は問題ないらしい。

「翔太あつ！そういうお前だって、かなり恥かしいぞ？小学生だからって許されるレベルじゃないぞ？」

「え〜？やっぱそうかなあ？」

遼の反撃に、翔太は一転して弱気になって自分の股間を見る。

「二人とも、制服に対する中傷は、今この場でだけにしてくださいね」

小学生と中学生の漫談を黙って聞いていたメガネの少年が、穏やかな笑顔のまま釘を刺す。

メガネの少年は、明らかに着慣れていない二人に比べて、鮮やかな青の制服がよく似合っていた。半袖シャツとかなり短めの短パン、そして黄色いラインが二本入った青いハイソックスをそつなく着こなし、派手な黄色に緑色のストライプが入ったスカートも粋に巻いている。

「この制服は、伝統ある我が『笛スカウト隊』の誇りです。特に遼さんが着ている中学生用の『ライトグレー』は、隊の創設時からのオリジナルで、僕と翔太が着ている『青』の方がその派生型なんですよ」

あくまで穏やかに小学生に諭されて、吉武遼は慌てて謝る。

「あつ！悪い、いやつ、ごめん！そんなつもりはなかったんだけど…、真田くん、だっけ？本当にごめん。悪気はなかったんだ」

「真田一樹です。カズキって呼んでください。制服の話はそんなに気にしないでください。今のは建前で、実際は、僕も二人と同意見です」

「なんだよ！やっぱり恥かしいんじゃない！」

吉武翔太は、涼しい顔で言う一樹に、絶妙なタイミングでビシッと右手で突っ込みを入れて笑う。

「まあ、羞恥プレイだと思って楽しんでください。すぐに新しい扉が開いちやって、他人の痛々しい視線が快感になりますから」

「おいおい！」

弟に続いて、遼も一樹に突っ込みを入れるが、タイミングは微妙。

「ふふつ、本当かどうかは自分の体で確かめてください。あらためて、吉武兄弟の我が笛スカウトへの入隊を歓迎します。一緒にイロイロ体験していきましょう！」

一樹は、どうにも微妙な言い回しで締めくくって笑った。

「『吉武兄弟』か…」

遼は、目の前でじゃれ合う翔太と一樹を見ながら、おもわず感慨にひたつてしまう。三ヶ月前には想像もできなかった事ばかりだった。

父子家庭で一人っ子の自分に『母親』と『小学校六年生の弟』が同時にできることも、新しい『家族』と一緒に見知らぬ土地に引っ越して、地元のカウト隊に入隊することも。

一樹は、『弟』の翔太が転校して四月から通う小学校で親しくなった友人で、このスカウト隊には小学校二年生から所属しているらしい。

翔太が少年野球、遼が剣道と、それぞれ転校前まで続けていた競技を続ける環境が無いと聞いて、入隊を誘ってきたのだ。

遼は正直、乗り気じゃなかったのだが、現在は中学生が不足しているらしく、夏休み中の体験入隊だけでもと懇願され、関係者だという遼の転校先の中学校の担任からも内々に頼まれて、断りきれなかった。

そんな感慨にふける遼を、いつのまにか足元にいた、茶トラの猫の野太い鳴き声が呼び覚ました。



嶽乃古神社の社務所での着替えを終えた遼と翔太が、一樹に連れられて神社の境内の一角に移動すると、先に手際よく着替えを終えていた二十人以上の『仲間』が待っていた。

夏休みに入って間もないこの週末、遼と翔太は、早朝から貸し切りバスに揺られて一時間の距離にあるこの嶽乃古村で、笛スカウト隊デビューすることになるのだ。

「えっ！オレが先頭？」

一樹から申し渡された大役に、翔太は仰天する。

二泊三日で行われる今回の隊の活動で最初の行事であり、一番の晴れ舞台である嶽乃古神社の神事の行列で、神器の一つを持って先頭を歩けといわれたのだ。

「うん。新入りという意味では異例だけど、持って歩くだけで誰でもできるし、どうせなら、いきなり最高の羞恥プレイをさせて、早く快感に目覚めてもらおうと思ってね」

冗談っぽく一樹は言うが、早めに慣れさせようという気遣いだろう。

「遼さんは、今回二人しか参加してない中学生ということで、重たい神器のかつぎ棒を担いでもらいます」

「わかった」

一樹はその後、テキパキと隊員たちに指示を出して、笛スカウト隊全体を仕切っていく。

顔色の悪い白髪の隊長はただ居るだけで何も言わず、もう一人の中学生も素直に一樹に従っていた。

不思議そうな遼と翔太の表情を読んで、もう一人の中学生、田嶋一哉が苦笑気味に二人に耳打ちする。

「本来の隊長が入院中で、ずいぶん昔に引退したOBが隊長代行なんだ。オレも入隊2年目だから、小六でも一番古株の一樹が、今は事実上の隊長さ」

「うわあ！こんなにっ？」

参道の両側を埋める人垣に、玉砂利を踏みしめて先頭を歩く翔太は目を丸くする。

午前十一時ちょうどに始まった嶽乃古神社の神事は、古来から伝わる三つの神器を、十歳から十五歳までの少年達が捧げ持って、嶽乃古神社の下社の本殿から、裏山の頂上にある上社の本殿まで、約一時間かけて運ぶというシンブルな行事だ。

ただし例年は、神器に見立てた農作物を運ぶだけで、本物の神器が披露目されるわけではない。

ところが、今年は二十年に一度の特別な年で、普段は非公開の本物の神器が、実際に神事に出されるということで、田舎の小さな村とは思えない数の観客が押し寄せているらしい。

「：すげえっ、なんか、キンチョーしてきたかも」

翔太は、むしろ楽しげに呟くと、両手で抱えた三方を持ち直した。

三方には、『天狗の鼻』という、その名のとおり天狗の鼻のような筒状の金属器が載せられていて、晴天の日の光で金色に輝いている。

そして翔太の一步下がった左隣では、一樹が、『天狗の腕輪』という大小のリング状の金色の金属器を載せた三方を両手で抱えていた。

その二人の直ぐ後ろに、馬の鞍に似た三つ目の神器で『天狗の枕』という金属器を吊り下げた、檜のかつぎ棒を担いだ吉武遼と田嶋一哉の中学生二人が続き、さらにその後ろに、残りの隊員たちが続く。

「りょおーっ！すげえ格好だなっ！似合ってるぜっ！」

「ううあつ、なんで：？」

突然、観客の中からクラスメートに声をかけられ、遼は堪らず赤面しながら視線を落とす。誰にも今日のことは言っていなかったのに：。

「：あ、またコイツ、こんなところに：」

すると、遼の足元では、着替えの際にも、いつの間にか侵入していた茶トラの猫が、堂々とした態度で行列に加わっていた。



「みんなっ！お疲れ様でした！二十年に一度というお祭りでの大役を無事に勤めて、毎年お世話になっている嶽乃古村の皆さんにも喜んでいただけました！今年の夏キャンプも上々の滑り出しです！」

一樹は、他の隊員たちを整列させると、電源の入っていないマイクを小道具に『隊長代行の代行』として挨拶を始めた。

笛スカウト隊の少年達は、一時間かけて小さな山の頂上にある嶽乃古神社の上社に三つの神器を無事に納めた後、そのまま嶽乃古神社で炊き出しの昼食を振舞われて、現在は村営キャンプ場に移動していた。

なぜか他に利用者がいないキャンプ場は笛スカウト隊の貸切状態だ。

「隊長代行の福田さんは、腰痛が再発したので宿舎で先に休んでもらっています。そしてこの時間は、本来は、すぐそこに流れている川での活動の予定でしたが、指導者が不在なので急遽変更します。…まあ、本当は別になくても出来るけど。もつと他に大事な活動があるから」

一樹は思わせぶりにそう言うと、遼と翔太を手招きする。

翔太はキョトンとした表情で前に進み出るが、遼は何かに気づいて緊張した表情でその後に続いた。

一樹は二人を木製の朝礼台のような台に載せて、高らかに宣言する。

「それでは、新しく仲間になった、吉武遼さんと、吉武翔太くんの『裏』というか『本当の』入隊式を行います！」

一樹の宣言に、隊員たちは大きな歓声で応えた。

翔太は事態が飲み込めずにオロオロするばかりだが、遼は、全てを悟って天を仰いでいる。

「というわけで二人とも、チンポ出して自己紹介ね」

笑顔のまま、一樹はさらりと酷いことを言う。

「いきなりそう来たかっ…！」

遼は、一樹の言葉にさすがに驚いた。

正直な話、夜になれば、そういう場面もあるだろうと覚悟していた。

中途からの新参者に、それなりの通過儀礼は要求されるだろうと思っていたし、若いオトコの集団では、結局チンポの話になるはずだと。

「いや、せっかくだから、相互オナニーくらい披露してもらおうぜ！」

中学生の田嶋が、悪気の無い笑顔でさらに火に爆弾を投入する。

そして、一気に他の隊員たちに誘爆して、もうソレしかないという雰囲気になってしまい、一樹は、ただ苦笑して傍観を決め込んでいた。

「…っえ？え？」

翔太は泣きそうな顔をして呆然としていた。ずっとガキ大将的ポジションだったため、こういう状況の対処方法がわからないのだ。

「…やってみるか」

遼は、さすがに度が過ぎると感じたが、一樹や他の隊員たちの邪気無く期待する目を見て、公開相互オナニーをする覚悟を決める。

彼らは自分達を試しているのだ。おそらく、拒否しても問題は無いが、彼らに受け入れてもらうには、そのほうが手っ取り早いはずだ。

「翔太、やるぞ。大丈夫だ、オレを信じろ！」

遼は、パニック寸前の翔太に耳打ちして、さらに目を見て強く頷く。

「遼ちゃん…」

翔太は、驚きながらも小さく頷いた。

「遼っ！空いてる左手で乳首も勃たせてみるよ！」

遼と翔太は、台の上で並んでパンツと下着を下ろして膝立ちになり、シャツも前をはだけて、お互いの完全勃起したペニスを扱きあっていた。

遼は、田嶋の言うとおりにすると同時に、翔太のペニスをさらに強く扱きあげる。

「遼ちゃああんっ！もう、オレっ！」

「よしっ、一緒に出すぞっ！」

次の瞬間、完全勃起した遼のズル剥けペニスと翔太の包茎ペニスから、同時に勢い良く白い粘液が発射された。



「お見事！兄弟同時発射成功っ！」

ワザとらしく陽気な一樹の『実況中継』に、それまで固唾を吞んで見守っていた隊員たちは一斉に歓声をあげて拍手をする。

「吉武兄弟の覚悟と度胸、しっかり見せてもらいました！本当なら、今度は我々がお返しに同時射精を披露すべきですが、さすがに二十四人同時は難しいので、別の機会に個別にお返ししましょう！」

「えっ？そうなのか？」

まともに入った一樹の言葉に、すでにパンツと下着を下ろして、勃起チンポを晒していた田嶋は、あきらかに不満そうだ。

ドツと、全員から笑いが沸き起こり、遼と翔太も一緒に笑った。

「今朝、バスの中で説明した通り、今回のキャンプでは、野外炊飯など様々な野外活動はこのキャンプ場を中心に行いますが、夜は、最近オープンした嶽乃古村の宿泊施設を使います。村の大地主だった人のお屋敷で、カッコいい洋館です。今回、一晩中、襲いかかってくる虫の大群と死闘を演じる必要はありません！」

なんとか田嶋のチンポを納めさせた後、この後の予定を説明する一樹の力強い言葉に、遼と翔太以外の隊員たちは熱烈な歓声で応えた。

去年は、かなり酷いめにあったらしい。

「では、少し早いけど、さっそく宿舎の『嶽乃古館』に移動しましょう。素敵な温泉もあるそうなので、楽しみにしていってください」

キャンプ場から徒歩で十五分ほどの森の中に、豪華な石造りの洋館が現れると、隊員たちからは歓声というよりは驚愕の声があがった。

「…なんか、サスペンス映画に出てきそうだな…」

「そうそう！泊まった出演者が次々と襲われる感じの！」

「…」

田嶋の感想を受けて翔太が放った言葉に、これから、まさに宿泊することになる全員が微妙な表情になる。

「…施設の人には言うなよ」

遼は、順平の頭をボンと叩いた。

「すげえっ！温泉旅館みたいだっ！」

真っ先に脱衣所を飛び出した翔太の大声が、山の向こうへ抜けてく。

嶽乃古村の村営研修施設『嶽乃古館』は、本格的な石造りの洋館ながら、和風の露天風呂を売りにしていくそうで、笛スカウト隊の少年達は十人単位で三班に分かれて、交代で露天風呂を満喫していた。

最後の第三班は、遼と翔太、そして一樹を含めた残り六人で、他にはもう一人の中学生である田嶋一哉と、翔太や一樹と同学年の稲田裕也と三上拓真の三人が一緒だ。

「それにしても、この彫像、もう少し、なんとかならなかったのか…」

ちよつと不気味な地蔵のようなデザイン、人間と同じ高さの巨大な木製の彫像が、風光明媚な露天風呂の真ん中に置かれていた。

遼の困惑気味の言葉に、一樹が苦笑気味に答える。

「それは、この村に古くから伝わる『天狗の使い』と呼ばれる彫像のレプリカです。ちなみに、村の名誉のために説明すると、その彫像も含めて、この露天風呂はもとからこの洋館にあったもので、センスが悪いのは元の持ち主だった大地主さんです」

「りょーかい！」

言っていないことまで含めての完璧な答えに、遼は苦笑して頷く。

「それにしても、遼さん、チンポでかいね！しかもズル剥けだし」

自分自身は、完全に被った包茎ながら、かなり長いペニスの三上拓真が、心底感嘆したふうで遼のチンポを覗き込む。

「えっ？ああ、まあ、どちらかというと、そうみたいだな」

遼は、苦笑しながら肩を竦めた。

「そうそう！すごいよね！今もそうだけど、さっきの公開オナニーの時のフル勃起したチンポなんかすごかったよね！」

亀頭の先が少しだけ露出した包茎で、一番小さいチンポの稲田裕也も勢い込んで同意しながら、遼のチンポに肉薄する。

「一樹、てめえ、俺のチンポと遼のチンポを見比べたな？」

一樹の視線を感じた田嶋一哉は、苦笑しながら一樹の頭を小突く。

田嶋のチンポは、けっして小さいわけでは無いが、遼に比べると明らかに大きさでは劣勢な、亀頭が半分くらい露出した包茎で、また一樹自身のチンポは、標準よりは少し大きめな完全に被った包茎だった。

「すいません、同じ中学生でもずいぶん違うなって、あ痛っ！」

田嶋は『小突く』から『殴る』に切り替えて三発追加した。

「うるせえっ！俺は標準サイズだ！遼のがデカ過ぎるんだよ！」

「わかってますよ、冗談ですって。遼さんは、剣道でしたっけ？チンポもだけど、身体も鍛えられた凄い筋肉だね」

本気で痛かったらしい一樹は、少し涙目になりながら、遼の身体を改めてじっくりと見る。

他の隊員たちの身体も十分良く締まっていたが、遼の鍛え上げた肉体は、筋肉の付き方と密度が桁違いな印象だった。

田嶋もかなり鍛えていたが、それでも遼のほうが遥かにキレがある。

「遼ちゃんは、全国レベルの選手なんだぜっ！いまはまだ何処にも所属してなけど、毎日のトレーニングは欠かさないんだ」

翔太が、自分のことのように胸を張る。チンポは、標準サイズで完全に被った包茎だ。

「まあ、そういうこと。トップレベルの連中は俺よりもっと凄いぜ？」

さすがに照れくさいのか、遼はぶっきらぼうにそう言うのと、強引に話題を変えてくる。

「そういえば、今日の神器って実際どうなんだ？凄いモノなのか？」

「…ええ、たぶん。正式な調査研究がされていないので、なんとも言えませんが、いわゆるオーパーツだって言う学者もいます」

一樹が以前、村の老人に聞いた話では、神事自体が、本来はもっと怖いものだったという。

「本来は、神器を運んだ少年達も供物、つまり生贄だったそうです。上社に神器と一緒に奉納されて、三日後に神器と一緒に『回収』された時には、正気を失っていることが殆どだったとか」

怪談のように語る一樹は、さらに不気味な情報を続ける。

「ちなみに、あの神事はずいぶん昔から、毎年、少年ではなく巫女や大人で行われていて、ちゃんと定められた年齢の男子で行われたのは、僕ら笛スカウト隊が手伝うようになった五年前からです。つまり、二十年に一度の、本物の神器を男子が運んだのは、いつ以来か不明です」

「…じゃあ、オレらって生贄になっちゃうのか？」

翔太の何気ないつぶやきに、皆は顔を見合わせて、次の瞬間、ドツと笑いながら翔太の頭をポンポンと叩きまくった。

「なんだよー！」

「なあ、記念写真撮ろうぜ！ちゃんと全員がチンポ見せてさ」

翔太が、完全防水のデジタルカメラを持ち出して提案すると、一樹以外の全員が笑って話しに乗ってきた。

「いや、一樹隊長にもチンポ出してもらうぜ！」

遼は、一樹に抱きつくともやりと笑った。もちろん、公開オナニーの意趣返した。

「…わかりました」

遼の意図を察した一樹も、潔く観念して同意する。

「じゃあ、いくよー！」

タイマーをセットした翔太は、映像を中心にカメラ目線でポーズを取る仲間達の下へ慌てて戻り、がに股ダブルピースをした。

間髪おかずに、思ったより大きなデジカメのシャッター音が響き渡った。







「うーん。やっぱり、光ってるよなあ…」

一樹は、翔太から預かったデジカメのモニターを見ながら首を捻る。

消灯後に、隊長代行の福田に諸々を報告をしたついでに、ロビーにあるコインPCで、夕方に露天風呂で撮影した全裸集合写真のデータをコピーしようと思ったのだが、デジカメのモニターで画像を確認したところ、一緒に写っている彫像の目が光っているように見えるのだ。

「何かが写りこんだにしては、出来過ぎだし…。まあ、PCのモニターで見てもれば何かハッキリするかな」

消灯後は、廊下なども照明が絞られていて薄暗く、古い洋館を改装した施設は、ほとんどお化け屋敷のような雰囲気だった。

「…素敵な雰囲気だね」

そんな薄気味悪い廊下を、苦笑しながら足早にロビーに向かっていった一樹の背後に、突然、何か大きな気配が出現する。

「っえ？あつ！」

驚いて振り向こうとした一樹の全身に、いきなり電撃のような強い衝撃が走り、そのまま意識が遠のいていった。

「…っん、あ、え？」

意識を取り戻した一樹が最初に目にしたのは、逆光の中で、人間にしては巨大すぎる頭の人型のシルエット二体と、アーモンド形に光る目のようなモノ、そして何本もの触手のような腕をもった何か。

『…夢？』

そう思った一樹は、自分の意識が混濁していることを自覚しつつも、必死に自分の置かれている状況を理解しようとする。

テーブルのようなモノに寝かされ、両腕を頭上で一纏めに縛られ、両足はそれぞれ、テーブルに括りつけられている。

そして、何故か下半身は裸で、チンポが丸出しになっていた。

『…誰かの悪戯か？』

とっさにそう思ったが、そこから先は思考がまとまらない。

そうして一樹の思考が空転している間に、いつの間にか、光り輝く筒のようなものが、触手によって一樹の股間に運ばれてきていた。

それが神器の『天狗の鼻』だと気がついた一樹は、混濁した意識の中で、なぜか全てを理解した気がしていた。

『あ、僕は生贄にされるんだ』

絶望と、これから自分の身体に行われる行為への具体的な不安に、混濁した意識のままパニック状態になっている一樹のアナルに、『天狗の鼻』の先端が押し当てられる。

「あつ！」

冷たい金属器の神器の感触に、全身が緊張する。

しかし、すぐに股間の神器は眩い光を発し始め、アナルから暖かい波動が全身に広がっていった。

そして、一樹の意識の中で『天狗の鼻』にアナルを犯されたい欲求が爆発的に湧き上がり、自ら腰を浮かせてアナルの力を抜き、懇願の言葉を口走ってしまう。

「っ！くださいっ！僕を犯して貪りつくして！」

次の瞬間『天狗の鼻』が一気に一樹のアナルに深く挿入され、さらに強く光りを発して細かく振動を始めた。

「っあああああんっ！」

一樹のペニスはポンと跳ね上がって完全勃起し、すぐに勢い良く精液を吹き上げた。

「はあああんっ、あああつ…！」

さらに全身から射精欲求がどんどん沸きあがってチンポに流れ込み、一樹は悶絶しながら断続的に射精し続ける。

ただし、射精するたびに『天狗の鼻』にエネルギーを吸い取られていく感覚が襲い、明確な命の危険を感じながらの射精だった。



「一樹、いないね」

「ああ。ここに居ないとすると、あとは何処だ？」

薄暗いロビーを見渡して、遼と翔太は首を捻った。

一時間以上前に部屋を出た一樹が戻らないので探しに来たが、一樹が行きそうな所はすべて探しても何処にもいないのだ。

「ひよつとして、行き違いになったかなあ？」

「…そうだな、戻ってみるか」

遼が翔太の言葉に小さく頷いて踵を返すと、翔太は遼のシャツの背中を掴んで引き止める。

「ん？」

「…あの、えつと、…に、に、兄ちゃんっ！昼間はありがとう…。オレ、一人だったら泣いちゃったかもしれない。」

翔太は首まで真つ赤になりながら、小声で囁いた。

4月に『兄弟』になって以来、翔太が遼を『兄ちゃん』と呼んだのは初めてだった。遼は、目を見開いて驚いたが、そのまま何も言わずに微笑んで、翔太の頭に手を置く。

翔太は、照れくさそうしながら、遼の腰に腕を回して身体を寄せた。

決して仲が悪かったわけではないが、どうしても他人行儀なところがあつた翔太との距離が少し縮んだ気がして、遼は嬉しかった。

結局、こうやって少しずつ、地道に積み重ねていくしかないのだと、翔太の体温を感じながら、遼はあらためて思った。

「…えっ？」

部屋に戻ろうとした二人の前に、突然、『それ』は現れた。

翔太と同じくらいの身長で、赤色のスピードのエイスのような頭にアーモンド形の光る目が付いた、スカートだけで足の無いロボットが、まったく音も無く浮いて、近づいてくる！

そして、二人が悲鳴を上げる寸前に、ロボットの股間のチンポのような突起から強烈な光が発射されて、二人は意識を失った。

目を覚ました遼が最初に感じたのは、背中痛みだった。

「んっ…、っ！そうだ！」

そして、すぐに不気味なロボットの事を思い出して跳ね起きると、そこは食堂の床だった。

翔太もすぐ横で床に寝かされていて、遼の声で目を覚ましたようだ。

「んっ、りょうちゃん？」

まだ寝ぼけている翔太と遼が目合わせた瞬間、

「っひあっ！」

二人の全身に衝撃が走り、二人同時に奇声を発して悶絶する。

お互いの首には、いつのまにか『天狗の腕輪』が首輪のように嵌められていて、暗闇の中で強烈に発光していた。

「しょうたっ…！」

「にいちちゃんっ…！」

二人は強く見詰め合ったまま、同時に生唾を飲み込む。

遼は、翔太のアナルを犯して射精したい欲求が爆発的に沸きあがり、翔太は、遼のペニスに犯されて精液を流し込まれたいと強く思った。

そして、不思議なことに、お互いに相手の欲望がハッキリと『聞こえて』いるのだ。

黙って翔太を抱えあげてテーブルにのせた遼は、翔太のパンツと下着を脱がせ、シャツも肌蹴させる。そして、自らもパンツと下着を下ろして完全勃起したペニスを出し、翔太のアナルに押し当てた。

「…うん。兄ちゃんのでっかいチンポ、オレにぶち込んで！」

遼の無言の問いかけに、翔太は歓喜に満ちた笑顔で答えた。

「っんんあああんっ！」

翔太の嬌声が食堂に響き渡った。



「いい朝だなあ！きつと飯が美味いぞお！」

田嶋の無駄に大きくて陽気な声が、早朝のキャンプ場に轟く。

夏キャンプ二日目の早朝、笛スカウト隊は、村営キャンプ場で野外炊飯を行っていた。

ただし、隊長代行には内緒で、少年達だけで行う秘密活動だ。

「なあ？遼？そう思わないか？」

苦笑気味にそう言いながら、田嶋は遼の肩を不自然に強く叩いた。

「つくああつ！」

遼の腹の底から搾り出すような悲鳴が、爽やかな早朝の空に抜けていき、他の隊員達からは、歓声とも悲鳴ともとれる声があがる。

遼は、靴とソックス、そして前をはだけたシャツにスカーフだけを身に着けたほぼ全裸の状態で、さらに後ろ手に縄で縛られたうえで、不自然な『がに股』の体勢で飯盒のかけられた釜戸の脇に立っていた。

その遼と釜戸を挟んで向かい合うように、まったく同じ状態ではほぼ全裸の翔太が立っている。

二人の間には鉄の棒が渡されていて、その鉄の棒から、飯盒が一つ、釜戸の火の上に吊り下げられていた。

そして、遼と翔太の間に渡されているその鉄の棒は、二人の睾丸を縊り出すように淫褻の根元を縛った縄で吊るされていた。

つまり、鉄の棒と、米と水の入った飯盒の重量を、遼と翔太の金玉四つで支えているのだ。

遼と翔太のペニスは、異常な状態に反応して完全勃起しているが、当然快感など微塵も無く、形容しがたい苦痛に声も出せない状態で、二人は全身に脂汗をかきながら歯を食いしばって耐えているが、翔太は、既に目に涙をいっばい貯めて泣き出す寸前だった。

そんな二人に、他の隊員たちは様々なやり方で振動を与えて、その度に、二人の睾丸に振動が伝わってさらに激痛が襲うという仕組みになっていた。

「みんな、キチクだなあ」

釜戸の火に木の枝をくべていた三上拓真は、みんなが田嶋の後に続いて二人を小突くのを見て、肩を竦めた。

「まさか、あの『金玉炊飯の刑』と『尻肉燻製の刑』を実際にやることになるなんて、思ってもいなかったな…でも、おれはむしろ…」

三上拓真は、遼と翔太の悲鳴を聞きながら感慨深げに呟くと、遼の剥き出しの亀頭を木の枝で軽く叩いた。

遼と翔太が『処刑』されている釜戸の隣の釜戸では、一樹が全裸に剥かれて、まるで狩られた猪のように、太い木の棒に両手両足を纏めて縛る形で吊るされて、火に炙られていた。

そして一樹は、火の熱よりも、煙で苦しみ悶えているようだった。

夏キャンプ二日目の早朝、遼と翔太は食堂で、一樹は会議室で、それぞれほぼ全裸で眠っているところを、仲間達に発見されていた。

しかも、どちらの部屋も精液の匂いが充満し、三人の身体には性行為の跡が生々しく残っていた。

そして、遼と翔太は意識を失うまでセックスをし、一樹もアナルを何かに犯されながら射精し続けたことは覚えていて、その事は素直に認めたが、なぜそうなったかは、まったく思い出せなかった。

結果として、三人は自分の欲望で性行為をしたことになり、笛スカウト隊の不文律である『隊の活動中はいかなる性行為も禁じる』を犯したと見なされて、創設時から伝わる方法での懲罰を受けているのだ。

「…っ、なあ、もう翔太は許してやってくれ！俺がコイツを犯したんだ！あとは俺がどんな懲罰でも受けるからっ！」

ついに、わんわんと泣き出した翔太を見て、遼はたまらず叫んだ。

最初は悪ノリに沸いていた仲間達も、さすがに微妙な空気になっていたこともあり、一樹も含め三人の懲罰はそのまますぐに終了となった。



「最初に謝っておくぜ。これはもう『懲罰』じゃない。すまない」

田嶋は、遼を吊るした縄を木に結ぶと、本当に申し訳なさそうな表情で頭を下げる。

遼は、スカーフと靴すら奪われ、ソックスと前をはだけたシャツだけのほぼ全裸のまま、荒縄で亀甲縛りにされ、さらに後ろ手に拘束されてキャンプ場の森の木から吊るされていた。

また、右足も膝から縄で吊り上げられていて、大股開きでチンポとアナルを強制的に晒させられている。

「…どういふことだ？」

すでに、何かおかしいと感じていた遼は、自分でも驚くほど冷静に田嶋に問いかける。

「ここにいる三人は、お前と同様に規則破りを覚悟した男達だ。規則を破ってセックスをする。あとで『金玉炊飯』をする覚悟もできてる。お前は、オレ達に無理やり犯されるだけだから懲罰の対象外だ」

田嶋一哉と三上拓真に稲田裕也、昨晚一緒に風呂に入った三人が、遼を性的欲望に満ちた目で見つめていた。

しかも、遼達四人を、十人ほどの仲間が、すこし離れた場所から取り囲むように見守っていて、遼を助ける素振りはいま一つ足りない。

つまり、遼は、爽やかな風が吹く森の中で、十人の仲間に見られながら、中学生と小学生に公開レイプされるということになる。

「…何かカッコいいことを言ってるように聞こえるけど、ようするに俺を騙して縛って、無理やり犯すんだろ？」

遼は本気で呆れながら言い返すが、田嶋たちは苦笑するだけだ。そんな田嶋達の様子に、遼は強烈な違和感を覚えていた。

ここまで酷いことをしようとしているのに、田嶋達に悪意が微塵も感じられず、笛スカウト隊全体もあっさり許容しすぎている。

さらに、そもそも『金玉炊飯』という懲罰自体、やりすぎだ。『何かおかしい…。絶対に変だ…っ!』

「っえ！うわあっ!」

事態の異常さに気づいて焦りだした遼のペニスを、突然、三上拓真が口に入れた。そして心底嬉しそうに嘗めしやぶり、金玉ともども大事そうに、丁寧に愛撫していく。

「う、おっ…」

稚拙ながらも真剣な愛撫に、遼のペニスは直ぐに完全勃起して透明な粘液を零し始める。

「へへっ、やっぱこのチンポ最高!」

三上拓真は、うつとりとした目で遼の完全勃起したペニスと淫囊を撫で回し、陰毛を弄んだ。

「でも、勝手に出したら困るから、ちよっと栓をしちゃうよ」

そう言いながら、ポケットから小さなホイッスルを取り出し、その紐で遼のペニスの根元と淫囊の根元をぐるぐる巻きにしている。

そして、キュッと結んで締め付けると、おもむろにホイッスル本体を遼の尿道口に捻じ込んだ。

「うおおっ!」

「うん、いいね!じゃあ、約束どおり最初は田嶋さんだね」
名残惜しそうにそう言いながら、三上拓真は遼から離れ、直近から遼のアナルにむけてデジカメを構えた。

その遼のアナルに、遼と同様にシャツとソックスだけになった田嶋が、完全勃起して粘液を零すペニスの亀頭を押しつけた。

「遼っ、すまねえっ!オレ達三人は、昨日、お前と風呂に入った後から、何故か、お前とセックスすることしか考えられないんだっ!」

切羽詰った声で叫びながら、田嶋は両手で遼の左右の乳首を強く摘んで揉みしだき、驚いた遼の気がそれた瞬間に、遼のアナルに一気にペニスを挿入する。

「っんんあああっ!」
その瞬間、遼の身体に衝撃が走り、遼はすべてを思い出した。



「来るなああっく！」

翔太は全力で逃げた、つもりだった。

『処刑場』のキャンプ場から宿舎の嶽乃古館へ戻った直後、遼と一緒に戻っていないことに気がついて、慌てて一人で外へ出た途端、目の前に、赤い色のスピードのエースのような頭のロボットが現れたのだ。

その瞬間、翔太は昨晚のことを全て思い出し、反射的に駆け出した。

しかし、すぐに全身に衝撃が走り、意識が遠のいていく。

「…お前らいったい何なんだよっ」

股間の激痛で覚醒した翔太は、目に飛び込んで来たモノの正体に気づいて全身の血の気が引いていくのを感じた。

おそらくは嶽乃古館の集会室と思われる薄暗い大きな部屋に、明らかに人間のものでは無い六つの目。

一対は、昨晚と今日、二回襲ってきた赤い色のロボット、そして残り四つは、巨大な卵形の頭に、幼児のような貧弱な胴体と手足が付いた、のっぺりした黄色い皮膚をした生物二体の目だ。

ソレは、アニメやマンガでよく『宇宙人』として描かれている『グレイ』そっくりで…。

そして翔太自身は、いつのまにか全裸に剥かれていて、床に置いた馬の鞍のようなモノ、あの神器の『天狗の枕』に跨がされていた。

しかも、両手はそれぞれ神器の後方左右に開いた穴に通した縄で拘束され、両足は左右の太股をやはり神器の穴に通した縄で頑丈に括りつけられている。

さらに、翔太が座っている鞍の山は、刃のような鋭角な金属製で、座っているだけでも翔太の股間を激しく苛み続けたが、太股を固定されているため、立ち上がることもできない。

「…っオレをどうする気だ！」

苦痛と恐怖に折れる寸前の心を奮い立たせて、翔太が黄色いグレイを怒鳴りつけると、きゅるきゅると耳障りな音が返ってきた。

『…オマエノ射精エネルギーを搾り取ルダケ、コロサナイヨ！』

そして、突然、頭に中に外人の日本語のような言葉が響く。

「えっ！」

『モノスゴク痛クテ苦シイケド、エネルギーノタメ、ガマンシロ』

「えっ？」

あまりに急な展開に呆然とする翔太を尻目に、黄色いグレイは赤いロボットに合図を送った。

すると、翔太の乗せられた神器の四隅に結ばれた縄が引っ張り上げられ始めて、神器はどんどん空中に浮き始める。

「い、嫌あああっく！」

事態を悟った翔太は真つ青になって叫ぶが、当然、神器の上昇は止まらない。しかも、このとき初めて、翔太は自分の両足首が縄で繋がれ、その縄はコンクリートブロックに通されていることに気づく。

さらに、神器自体が発光し始め、翔太の股間を苛む金属の山は強烈に振動し始める。

「嫌だっ！いやだああっく！」

翔太の絶叫と同時に、神器が跳ね上がるように急上昇して翔太の股間と睾丸を打ちのめすっ！

「ぎゃあああっく！」

翔太は絶叫と同時に、文字通り搾り出されるように大量の精液を、勃起した包茎から噴出した。

「…あっ！すげえっあ、あ……おれも、出したいっ」

直後に集会室の扉を開けた隊員達は、光り輝く神器を見た瞬間にそうつぶやいて、その場でいきなり全裸になると、絶叫しながら等間隔で射精し続ける翔太にあわせてオナニーを始めた。



『ヨシ！数値が安定シテキタ、ソロソロイケルゾ！』

『地球時間デ一時間以上カ、思ッタヨリ時間ガカカタナ』

『新型過ギテ、調整項目ガ多スギナンダ！』

『ダガ、コレ効率良ク地球人ノ射精エネルギーヲ回収デキルナ！』

『ヤハリ、骨董品ノエネルギー収集マシンデハ時間ガカリ過ギル』

『「天狗ノ枕」デ搾リ取ッテル「イケニエ…ショウタ」モ、新シイマシンニ切り替エルカ？』

『イヤ「イケニエ…ショウタ」ハ、モウホボ搾リ尽クシタハズダ。アノ骨董品ハ、パワーハ新型マシンニ劣ラナイカラナ』

『ソウダナ、デモ、搾ッタ射精エネルギーノ三割シカ回収デキナイウエニ、周囲ノ若イ男ヲ全員淫乱ニシテシマウカラナ』

黄色いグレイニ体は苦笑して肩を竦めた、ように一樹には見えた。

最初はきゅるきゅると不快な雑音だったものが、突然、カタコトの日本語として頭の中に響きだし、しばらくすると、微妙なニュアンスまで、ある程度は判るようになってきていた。

『…こいつらはいったい何が目的なんだ？射精エネルギーって？』

悪い夢を見ているような感覚のまま、一樹は困惑する。

一樹は、キャンプ場から戻った直後、慌てて飛び出す翔太に気づいて追いかけたところを、背後から突然襲われて意識を失い、気がつく、うつ伏せでまったく身動きがとれなくなっていた。

驚いて、なんとか動く頭を捻って最初に見たのは、巨大な卵形の頭に、幼児のような貧弱な胴体と手足が付いた、のっぺりした黄色い皮膚をした、いわゆる宇宙人の『グレイ』そっくりの生物だった。

その横には赤い色のスピードのエースのような頭のロボットがいて、目を不規則に点滅させている。

黄色いグレイは、一樹が意識を取り戻した事に気がついた素振りを見せたが、特に気にしていないようだった。

さらにその反対側にはもう一体『黄色いグレイ』がいたが、こちらはキーボードのようなモノを夢中で操作していて気づいていない。

部屋の奥にあるキャットフードやまたたび等の猫グッズ、その他様々な生
活雑貨から、場所は嶽乃古館の地下倉庫で間違いないだろう。

『…夢、だったら、いいんだけど…くそうっ！』

あまりに荒唐無稽な光景にまったく現実感が無いが、自分の肉体に突きつけられた感触は冷酷な事実を告げていた。

一樹は全裸に剥かれていて、金属製と思われる巨大なナマズののような装置にうつ伏せに拘束されていた。

ナマズの尾にあたる部分は四十五度くらいの角度で上を向き、一樹はその尾を跨いで、両足を蛙のように開いて股間を押し付ける体勢で両足首を金具で固定され、両手首は尾の先でまとめて固定されている。

さらにアナルには太い金属棒が挿入され、ペニスと睾丸は機械の中で何かにガツチリ握られたうえに、尿道にも管が挿入されている。

また両方の乳首も電極のような金具に苛まれていた。

『オイ「イケニエ…カズキ」！』

「……っえ？」

一樹は、自分が呼ばれていると気づくまでたっぷり十五秒かかってから、慌てて向かって右側の黄色いグレイを見る。

『古ノ契約ニ基ヅキ、オ前ノ射精エネルギーヲ搾リ取ル。コノマシンハ精液ヤカウバー液ナドモ全テエネルギートシテ回収スルノデ、サラニ劇的ニ痛クテ苦シイケド、射精エネルギーヲ絞り終ワルマデハ、死ナナイデ、我慢シロヨ』

黄色いグレイは酷いことを言っただけで笑った（ように見えた）

さすがに怒った一樹が怒鳴り返そうとした瞬間、一樹の目の前のモニターが激しく点滅を始めた。

「えっ！つひぎやあああああっ！」

一樹の龟头、尿道、睾丸、そしてアナルと両方の乳首に苛烈な電撃が加えられ、激痛しかない強制的な射精がマシンガンのように始まった。



『イトコロニ来タナ「イケニエ…リョウ」、チョウドオ前ノタメノマシンノ調整ガ終ワッタコロダ』

「うっ…!」

地下室の扉を足で蹴破るように開けた遼は、目に飛び込んで来た光景と、頭に鳴り響いた謎の声に絶句する。

地下室の中には、昨晚自分達を襲った赤いロボットと、あからさまに地球人じゃない『黄色いグレイ』二体、そして、怪しい機械に拘束されて絶叫しながら、悶え苦しんでいる一樹がいた。

田嶋達三人に一時間以上も野外公開レイプされた遼は、際限なく、狂ったように自分を犯している三人をなんとか言い含めて縄を解かせ、すかさず三人を殴り倒して嶽乃古館に大急ぎで駆け戻ったのだ。

翔太がまたあのロボットに襲われている、とほぼ確信に近い不安に突き動かされ、はだけたシャツとソックスのみというほぼ全裸のまま、靴すら履かずに駆け戻った遼が最初に見つけたのは、やはり襲われて無残な姿になった翔太だった。

翔太は、集会室の真ん中で、全裸で縄で中に浮いた『天狗の枕』に跨ったまま、精液まみれになって、ぐったりとうな垂れていたのだ。

その翔太を取り囲むように、十人以上の仲間が一心不乱に全裸でオナニーをしていたが、全員すでに正気を失っていた。

なんとか助けた翔太は、意識が混濁して呼吸も荒く、固く勃起したままのペニスは、ビクンビクンと断続的に空打ちをしていて、このままでは危ない、遼がそう思った直後、頭の中に謎の声が鳴り響いた。

『「イケニエ…ショウタ」ヲ助ケタケレバ地下室へ来イ』

いかにも危険な誘いだだったが、他に選択肢も無く、遼は、翔太を抱きかかえて地下室に来たのだった。

『「イケニエ…ショウタ」ヲ助ケテ欲シケレバ、「イケニエ…リョウ」モ新型マシンデ射精エネルギーヲ搾リトラセロ。マア、拒否シテモ無理ヤリヤルケド。アト、一番痛クテ苦シイケドナ』

黄色いグレイは、笑いながら（のように見えた）言い、金属製の触手が何本も生えた丸い台のような機械を指し示した。

「…つくそおっ!」

悪夢としか思えない状況で、腕の中の翔太が痙攣し始め、遼は腹を括るしかなかった。

『ズブン大量ニ中出シサレテイルナ、モッタイナイ』

「っんっ」

黄色いグレイの嘲笑にも、遼は応えることはできない。

遼の口には太い触手がねじ込まれ、胃まで到達していた。

台の上に全裸で上げられた遼は、大きく足を開いた膝立ちを命じられ、伸ばした両腕を背後でまとめて触手で拘束され、両足首も触手で固く拘束されていた。

その体勢のまま、アナルは二本のマニピュレータで大きく開かれ、太さと形が違う二本の触手が奥深くまで挿入されて、前立腺を強く苛みながら田嶋達が流し込んだ大量の精液を吸いだしていく。

両方の乳首もマニピュレータで強く摘みあげられ、強制勃起させられたペニスもマニピュレータで固定されて、亀頭も触手の透明なフードで覆われながら、尿道にも管が突き入れられた。

二個の睾丸もマニピュレータで強く握られ、引き伸ばされている。

『ヨシ、微調整完了ダ。コレデ限界ギリギリ死ヌ寸前ノ苦痛デ、最大限ノ射精エネルギーヲ搾リ取レルゾ』

黄色いグレイの残酷な言葉と同時に、モニターが点滅し始める。

「…っんごおっ!」

すべての触手やマニピュレータから強烈な電撃が襲い、同時に激しく動いて遼のチンポやアナル、乳首を攻め立てはじめた!

そして遼の周りでは、いつのまにか集まっていた、正気を失った笛スカウトの仲間達が、悶え苦しむ遼を見ながら、全裸オナニーをは始めていた。



どのくらい時間が経過したかはまったくわからないが、心臓が止まりそうな苦痛とともに射精し続けて、もう一滴も射精できずに空打ちをするようになったところで、遼は意識が薄くなっていくを自覚した。

『…つくそう、もう駄目か…』

遼がそのまま死ぬ覚悟をしかけたところで突然、激しい打撃音と破壊音が響きわたり、遼を苛んでいた触手やマニピュレータが一斉に外れていった。

『…っえ？うあっ！』

同時に、遼が載った台も激しく揺さぶられ、力なく座り込んだ遼は台から転げ落ちた。

「っ痛ってえっ！」

著しく消耗した身体はまったく思い通りに動かず、受け身すら取れなかった遼は激しく身体を床に打ち付けてしまう。

しかし、そのおかげで薄れていた意識も戻ってきて、なんとか起き上がった室内を見ると、またさらに現実感の無い光景に呆然とする。

地下室の様子は一変していて、黄色いグレイ二体は、ボコボコに殴られたような状態で床に寝転がり、赤いロボットは頭が不自然な向きに曲がって停止していた。

正気を失って全裸オナニーをしていた仲間達も、外傷は無いようだが、何故か全員が失神して床に倒れている。

そして、その地下室の中央には、また信じがたいモノが現れた。

「うっそお…」

遼は『やっぱり俺、死んだのかな』と半ば本気で思った。

遼よりすこし背の高い『猫人間』が、一樹をいわゆる『お姫様抱っこ』して仁王立ちしていたのだ。しかも尻尾でメガネを持ちながら。

茶トラのふさふさの毛で全身が覆われ、ピンとたった耳に長い尻尾、手足の指には鋭い爪があり、頭部にはさらに濃茶色の髪があった。

額に菱形の模様がある頭部の造りは猫に良く似ているが、目の上には、人

間の眉毛のようなものがあり、さらに、二本の足でまっすぐ立つ姿は全裸の人間そっくりで、チンポも乳首もあった。そして、遼を見る丸くて大きな目には、間違いなく強い意志と知性が宿っていた。

『ようっ！なんとかまだ生きてるな？上出来だ、よくがんばったな！』

「っえ？」

『あれ？翻訳機が上手く効いてないのか？』

猫人間は、自分の首にかかった首輪の鈴を、一樹のメガネを持ったままの尻尾で器用に突つついた。

「あつ、いや、大丈夫だ！ちゃんと通じているよ」

遼は、慌ててフオローする。

「そうか！オレは『☆○×▲』星から来た保安官の『▽▲□◎▽』だ！お前達を助けにきた。もう大丈夫だ！」

固有名詞については、なんらかの音は聞こえるが、地球人に発音できる単語としては認識できないものの、文脈から意味は理解できた。

この『猫人間』の説明によれば、地球人の十歳から十五歳までの少年が射精する際の生体エネルギーは、『黄色いグレイ』や『猫人間』たちの宇宙文明では最高級の精力剤として珍重されていて、『黄色いグレイ』の種族は、遥か昔に当時の村人を騙して、毎年、少年三人を生贄として供出させていたのだという。

『ずいぶん昔に止めさせたはずなのに、また復活するらしいというので、ずっと監視していたんだ。こいつの目を借りてね』

そう言つて『猫人間』は、いつも遼の周囲にいつのまにか居た、茶トラの猫の頭を、尻尾で器用に撫でた。

「わかった、その辺の話はもっと聞かせてほしいけど、まずは翔太をなんとかしないと！どうすればいい？」

遼は、休ませている翔太のことを思い出して『猫人間』に訴える。

『ああ、大丈夫だ、まかせろ！』

『猫人間』は、尻尾で自分の胸をポンと叩いた。



「はあああんっ！ああん、いいっ！すごいっ」

翔太は、顔を紅潮させ、あられもなく声をあげて喘いだ。

ロボットやマシンの残骸が転がる地下室の床に、翔太は直接仰向けに寝かされていて、大きく開いた両足の間に『猫人間』が入って翔太の完全勃起したチンポを咥えていた。

さらに、尻尾の先端で器用に翔太の左右の乳首を交互に弄り、赤く固く勃起させていく。

「…ざらざらして、イイっ！はあ、ああ、もう、もうっ出るうっ！」

翔太はそう叫びながら、ビクンっビクンっとして身体を震わせ、猫人間の喉が何かを飲み込むのがわかった。

『ようしいいぞ！がんばって、あと四発は射精しろ！その後で、今度はおれが尻を犯して三発ぶち込んでやるからな！』

「はう、あつ、うんっ、がんばるうっ！」

翔太は、涎を垂らして喘ぎ、快感に溺れた顔を晒しながら叫んだ。

「翔太っ…！」

そんな翔太と『猫人間』を、遼は複雑な思いで見ながら、少しだけ離れた場所ですぐに座り込んでいた。

となりでは、まだ意識を失ったままの一樹が床に寝かされている。

二人とも、もう一滴も出ないほど精液を搾り取られているはずなのに、ペニスは固く勃起したままだ。

正気を失っていた仲間達は、自分達の存在をなるべく知られたくないという『猫人間』の意向で、そのまま眠らされている。

「おいっ！チャトランっ！本当にこんな事で直るのか？」

『だれがチャトランだっ！』

我慢できずに遼が叫ぶと、『チャトラン』は、翔太を軽々と引っくり返しながら、あっさり返事をしてくる。

「だって、お前の名前は俺らには発音できないからな！『猫人間』のほうがいいか？」

『：チャトランでいい。…でも、覚えてろよ…』

チャトランは、最後のほうを小声で言いながら苦笑いをする。

「で、どうなんだ？あと、他の仲間達は大丈夫なのか？」

『オレを信じる！奴らのマシンは、地球人に有害な光線を使うんだ。放置すると発狂する。だから、神器についての伝承では、生贄たちは正気を失っている、となっているのさ。それを回避するためには、光線の影響を十二時間以内にちゃんとした快感で上書きするしかない』

チャトランは説明しながらも、うつ伏せにして、尻だけ高く上げた翔太のアナルを指で弄って、さらにチンポを牛の乳搾りのように扱いて翔太を快感に喘がせていた。

『ちなみに、翔太に飲ませた液体は、失った性的エネルギーを一発で回復させるスペシャルドリンクだ。強めの催淫効果もある』

「はあああんっ！」

翔太が嬌声をあげながら、射精して床を汚す。

『ほかの連中は、マシンの光線を直接受けたわけではないから、時間が経てば元に戻るさ。まあ、奴らはお前達が嶽乃古村に入ったときから監視していて、その間ずっと、下準備として、淫乱になる光線を全員に浴びせていたから、多少時間はかかるだろうけどな』

チャトランは胡坐をかいて座り、翔太を自分の股間に大股開きで座らせて、両手で翔太のペニスと睾丸を弄ぶ。

「もふもふ気持ちいいいっ！尻に当たってる太いのも欲しいようっ！」

『しょうがないな、ちよつと早いけど、もう入れてやる。そのかわり、尻の中には五発は射精するぞ？』

「うんうんっ！ちようぐだい！」

チャトランは、翔太を持ち上げると、自分の勃起ペニスを翔太のアナルにあてがい、そのままストンと翔太を落とした。

「はあああんっ！」



「嫌だっ！」

一樹は、顔を真っ赤にして首を激しく横に振る。

翔太とチャトランの激しいセックスの途中で意識を取り戻した一樹は、遼から一通りの説明を受けたものの、翔太の痴態を目の当たりにして、すっかりビビってしまったのだ。

「あんな姿を晒すくらいなら、死んだほうがマシだ！」

「バカ言っ！」

遼の怒鳴り声と同時にパンっという音がして、一樹は首をすくめて目を瞑り、身体を縮み上みあがらせた。

しかし、実際には一樹の顔には痛みも衝撃もなかった。

「…えっ？」

おそろおそろ目をあげると、遼が一樹を覗き込んでニヤリと笑っていた。どうやら音はただの拍手だったようだ。

「あきらめようぜ？どうせ、このままなら、気が狂ってもっと酷い痴態を生晒しまくるんだ。俺も、すぐ同じ目にあうからさ」

「…はい」

一樹も頭では判っていたのだ。もうどうしようもない事は。ただ、遼にこんな痴態を晒すのが、なぜかとても嫌だったのだ。

『そうだと！それに翔太を見てみろ！すげー幸せそうだろ？』

チャトランは胸を張って笑い、一応は台の上で満足げな表情で眠っている翔太を見た。

「…はい、お願いします」

一樹はペコリと頭を下げると、渡されていたペットボトルの液体を一気に飲み干した

「あああっ！深いっ！」

一樹は歓喜に満ちた声音で叫んで喘ぐ。

チャトランが一樹を犯し始めて約一時間、最初は羞恥に涙目だった一樹も

飲んだ液体の効果で完全にセックスに夢中になり、あられない声をあげて全身で快感を貪っていた。

チャトランは、翔太と同様に、最初は一樹のチンポとアナルを徹底的に弄り倒して五回連続で射精させた後、幼児に小便をさせる際の体勢のように、大股開きの一樹を背後から抱え上げた。

そして、まっすぐ上を向いて勃起している自分のペニスを一樹のアナルにあわせると、ゆっくりと一樹を下ろして挿入していった。

「ふとくてながいっすごいいっ！」

涎を垂らしながら、恍惚の表情一樹は喘ぐ。

さらにチャトランは、舌で一樹の肩を嘗め、尻尾を一樹の股間に回して、ふらふら揺れる勃起ペニスを器用に持って扱き始める。

「ああっん、んあっチンポもあったかいイ！」

『へへっ！もつと良くしてやるぜっ！これでどうだっ！』

チャトランは、ワザとスキップするような足取りで地下室内を歩き回り始めた。一樹は、チャトランの体の動きに合わせて上下に揺さぶられ、アナルに入ったチャトランのペニスが絶妙な角度で一樹の腹の中を突き上げる。

「あんっ！はあんっ！あああっ！」

一樹はチャトランのスキップに合わせて嬌声をあげ続ける。

「…あああん、おしっこっ！おしっこでちゃうっ！」

しばらくすると、再び顔を赤くして切迫した声で訴えた。

『いいぜ！そのまま出せよ。お前の好きな遼に、幼児みたいに小便を垂れ流すところを見てもらいな！気持ちいいぞ！』

顔を真っ赤にした一樹は、小さく頷く。

チャトランは、すぐにドンと一樹を突き上げ、その瞬間、一樹の勃起した包茎ペニスから、小便が文字通り吹き上がった。

「あああんっ！」

小便は、いつの間にか動き出していた黄色いグレイ達を直撃した。



『待たせたな！ようやくお前の番だぜ、遼！』

逃げ出そうとしていた黄色いグレイ達を縛り終えたチャトランは、ペットボトルを遼に渡しながらウインクした。

「ああ、すまないが頼む。でもお前は三人連続で大丈夫なのか？」

『もちろん大丈夫だ！俺はあと十人でも平気だぜ？それにお前達のセックスエネルギーは強力な精力剤だしな！』

「…そうか」

遼は、例の液体が入ったペットボトルを飲み干してから、ずっと気になっていたことを聞いてみる。

「…俺が田嶋達に犯されたのも、やっぱり黄色いグレイ達の光線のせいなのか？田嶋の言い方がちよつと引つかかっているんだ」

『ああ、アレは俺のせいだ』

「…え？」

あつさりと言うチャトランに遼は絶句する。

『温泉に彫像があつただろ？アレの目に細工してあつて、基本は監視だけなんだが、お前をレイプするように他の隊員達に暗示をかけた』

「なんでっ？」

『地球人の少年同士のセックスで発生するエネルギーは格別なんだ。それなのに、奴らはその辺が甘かったからな。おかげで、最高のエネルギーが採れてるぜ？』

「…お前は保安官で、俺達を助けにきたんだよね？」

『もちろんそうさ！』

「…そういうば、黄色いグレイもお前も、俺達が嶽乃古村に来たときから監視してた、って言ったよな？」

『ああそうさ！』

「なら、もっと早い段階で助けてくれても良かったんじゃないか？」

チャトランは、頭を掻きながら笑うだけだ。

「…ひよつとして、俺達がいいだけ搾られてから、それを横取りするのが目的で、保安官っていうのはウソなのか？」

遼は確信に満ちた目でチャトランを睨む。

『それは違う！』☆○×▲星の名誉にかけて、保安官の俺が、お前達の救出と奴らの逮捕を命じられてきたのは事実だ。そして任務は確実に果たす！ただ、俺が個人的に、せっかくのご馳走なんだから、任務に影響無い範囲で美味しい思いをしたいだけだ！』

チャトランは胸をはって、ドヤ顔で断言した。

「…わかった。もういい」

「うあああつ！痛あつ！」

ベット代わりの台の上で、遼はチャトランに乱暴な愛撫を全身に受けながら、快感に喘ぎまくった。

乳首を噛まれて、尿道に爪を入れられ、尻や内股を爪で引搔かれたが、すべての痛みが快感になってチンポを直撃し、激しく射精した。

尻を平手で痛打され、腹を拳で殴られても、金玉二個を手で握られてコリコリと潰されても、遼は快感に正気を失いかけて喘ぐ。

例の液体の効果で、全ての刺激が快感に変換されてしまうのだ。

自分の悪行がバレたことで、チャトランも完全に開き直って、自分の好みのセックスで遼を責め立てているらしい。

『へへっ！やっぱ最高！遼は頑丈だから思いっきり責められるぜ！』

チャトランは、遼の首を絞めながらアナルを犯して射精し、乳首を激しく摘み伸ばす。

『…遼なら、アレもできるな』

チャトランはニヤリと笑うと、遼を台から下ろして大股開きの『がに股』で立たせ、背後から両腕を纏めて右手で掴んで拘束した。

『アナルの力を目一杯抜け！でないと怪我するぜ』

チャトランは簡単にそう言うのと、左の掌を細くして遼のアナルにあてがい、ゆっくりと、しかし確実にアナルの中に入れていった。



「うーおおおっ！」

遼は、腹の底から絶叫し、頭を振って涎と涙を撒き散らしながら、チャトランの腕をアナルに受け入れていく。

「つうがあっ！」

一番太い部分がアナルを通過して一気に深く腕が入った瞬間、いままでで最大の飛距離で、精液が噴出した。

「まさか、ここまで効くとはね！」

翔太は楽しげに言いながら、チャトランの人間そっくりのズル剥けペニスと、毛皮に覆われた淫囊を掴んで揉みあげた。

『痛ってえ！よせってコラ！』

金玉を揉まれたチャトランは、激痛に涙目になる。

「ああ、ここも人間と同じなんだ！玉も二つだし」

チャトランは、両腕を天井から吊るしたロープで拘束され、全裸の遼と翔太、そして一樹に悪戯されていた。

「うわ、駄目だって！やめてよ！」

チャトランの尻尾が、一樹にチンポに巻き付いて反撃しようとし、一樹は必死に尻尾を掴んで離そうとしている。

「乳首も人間とほぼ一緒だな」

背後からチャトランに抱きついていて遼は、乳首を弄んで笑う。

『チクショウっ！やめろって！』

チャトランは、必死に逆らうが、身体にまったく力が入らない。

遼とチャトランの過激なセックスが終わった直後、復活していた翔太が、チャトランへの仕返しを目論んで地下室を探し回ったところ、猫用のまたたび粉末を見つけて、チャトランに浴びせたのだ。

そして、これが驚くほど効いてしまった。

「翔太、あんまり宇宙人をいじめるなよ？地球人は、いきなりフィストファックするような野蛮な種族じゃないんだからな？」

「うん！でも、兄ちゃん、今度オレも、兄ちゃんのお尻に腕を突っ込んでみていい？」

「……チャトラン、お前、どう責任取るんだ！」

『兄弟を繋ぐ『絆』が太くなって良かったじゃないか？腕とチンポじゃ太さがかなり違うぞ？』

遼は黙ってチャトランの金玉を後ろから蹴りあげる。

『ぎゃっ……てめえら覚えてろよっ！』

「まあ、そう言うなよ！せっかくのファーストコンタクトだ、じっくりと、お互いの体の事を知ろうぜ」

遼は、笑いながら自分の勃起させたペニスをチャトランのアナル（と思われる）穴にあてがう。

『おいっ！待ってっ！いきなりは無理だっ！』

「チャトランは頑丈だから、おもいつきり責められるぜ」

ニヤリと笑いながらそう言って、遼は、チャトランのアナルに自分のペニスを一気に全て突っ込んだ！

『うおおおっ！』

チャトランは絶叫しながら、ペニスから激しく精液を噴き上げた。

四人の足元では、全てを知っているような顔をした茶トラの猫が、野太い声で楽しそうに鳴いた。

そして、目に光が戻っている、破壊されたはずのロボットをちらりと見てもう一度鳴き、貫禄のある歩き方で立ち去っていった。

おわり





暑い中お疲れサマ〜夏コミ御来場の皆様こんにちは
イラスト担当の筍屋です♪

この度は この本をお手にとって頂き

誠に有難うございました m(_ _)m

さて 今回の合同本を作るに当たり2つの目標を立てました

ひとつは「今までやってないネタを盛り込む事」!

てな事で まず思いついたのが制服モノ+キャンプ

祭に兄弟ネタ メガネっ子 集合写真

その次に宇宙人オーバーツネタ&メカ姦

喜んで持って駄目押しでケモ(ショタ?)プレイ!

え〜いオマケに変なロボも付けちゃえ!…(x_x☆\ バキッ

う〜ん なんだかゴツタ煮というより闇鍋状態ですねえ(〃〃

案の定 詰め込み過ぎて消化不良な感じは否めませんが

一枚でも 皆様の萌えポイントに触れる絵が有ったとすれば

作者として この上ない幸甚であります m(_ _)m

ちなみに 個人的にはメガネっ子が意外ときました(笑)

ではでは次回作もよろし…えっ もうひとつの目標ですか?

滅多に叶わない同人作家の夢…それは

「早割期間に入稿する事!」ですよ(x_x☆\ バキッ

さて 夢は叶ったのでしょうか(笑)

なお 今回もお忙しい中 ロゴ作成で多大なご支援をして頂いた
ひろレン!様には この場をお借りして御礼申し上げます m(_ _)m

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp

竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>

(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

はじめまして&おひさしぶりです。

へたれ文字書きのた〜んけーです m(_ _)m

「早割期間に入稿する事!」という夢の成否については、
コメントを控えさせていただきます。

夢は、いつかきっと叶うものですよ!

…たぶん、きっと、だといいなあ。

今回は、いろいろ詰め込みましたが、

個人的には、メカ系とオーバーツ、そして集合写真に、
特に夢と希望(妄想のひろがり)を感じました。

本当は、夏っぽい感じにと、スク水も画策しましたが、
さすがに無理でした。

どこか一場面でも、皆さんの夢線に触れられたら幸いです。

超体験!? SUMMER BOYS!

2012年8月12日 初版発行

発行/筍御飯VF

著者/筍屋&た〜んけー

ロゴデザイン/ひろレン!

印刷所/株式会社 プロス(本文)

関西美術印刷株式会社(表紙)

連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp

2012年8月 た〜んけー

turn_k_vf@yahoo.co.jp



筍御飯
VF